

# 祇園祭

著者：毛 丹青

クールジャパン  
プロデューサーコラム

CJPF

COOL JAPAN Public-private partnership platform  
クールジャパン官民連携プラットフォーム

## 京都の夏の邂逅を果たす

「祭」の意味は中国語では「節日」に相当すると思うが、多くの場合、多くの人が集って人々の渦が巻き起こっているような情景をいう。おかしなもので、私は神戸に住んでいて、京都からは距離的に遠くはない。車でも電車でも一時間程度といったところだ。それにもかかわらず毎回京都へ行くときには、小さな旅に出かけたような気持ちになる。そして、毎回違った収穫がある。

もしその日が雨ならば、京都の雨は神戸より大雨であり、雷が鳴る日であれば、京都の雷は神戸より大きく轟くのだ。これは京都が山に囲まれ海に面していないことや、あるいはこの街が幽玄な古都であることによるものかもしれない。とりわけ伝統となっている祇園祭のときには、行き交う人のゆっくりとした足取り、山鉾の車輪が地面に擦れるときの「えーんやら、やあ」という掛け声、そして祇園囃子のコンチキチンという鐘の単調な音が、織り交ざり声が交錯し、この日の空はいつもより高いとさえ感じるのだ。

## 目に見えるもの、見えないもの

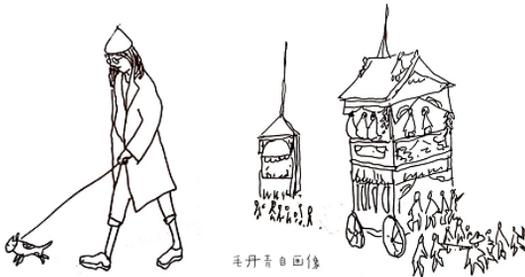
祇園祭の山鉾巡行の前日を「宵山」というが、この夜京都は数十万人の人出となる。見物人達は山鉾に飾られた駒形提灯を見ながら、刺すようなお囃子に耳を傾ける。そそりたつように立て掛けられた駒形提灯は盛夏の熱で凝固しているようだ。そして空気中に黒をまざまざと見ることが出来る。黒といってもそれぞれの黒の違いまではっきりしている。山鉾の垂れ幕、婦人の小刻みな歩き方と沿路の古い家屋の灰色の屋根瓦、また果てしなく広がる星空……。



【スマホで見る山鉾巡行】

## 色彩にずいぶんインパクトされた

実のところ、コロナ禍での開催停止は仕方がなかった。毎年宵山の行列に加わっていると、何故だかわからないが、その夜の喧騒が私に濃淡異なる黒の印象を与えているように思う。これは私が愛読する川端康成の「古都」の影響を暗に受けているのかもしれない。それとも私自身の気質なのか？日本的な祭に遭遇すると、ある種の興奮や同時にその興奮を全面的に発散させることができないような押さえつけられた感情があり、深く考えさせられる。もちろん考えたからといって必ず結論が生まれるわけではないけれど。



毛丹青自画像

【秋にも祇園祭を妄想】

## この地に代々伝わる伝統文化

祇園祭は平安時代の869年に始まった。当時疫病を防ぐために京都で「御霊会」が作られたことに起源する。毎年六十六の鉾を八坂神社まで引き無病息災を祈る。人々の多くが黒い衣をまとうて、行列も静粛なものだったという。

ルビ：節日（ジェーリー）